

# 即身成佛に就いて

灘 上 惠 教

佛敎の目的とするところは成佛であつて、それには小乗成佛、大乘成佛、及び法華經の成佛等の異りはあるが、兎に角宗旨信仰の目的が成佛を以て究竟とする点は疑へない。元來成佛といふことは、一般には菩薩が因位の萬行究竟して、阿耨多羅三藐菩提をば成辯することであつて、眞言では三種の即身成佛を立て、天台では四種の成佛を明し、占察經には四滿成佛等を説いてゐる。當家も矢張成佛を以て理想とするので、所謂即身成佛娑婆即寂光といふのがそれである。法華經の價値は、此の成佛が絶對的に成就せしめられる法なるが故で、方便品に唯有一乘法無二亦無三と説くは是れである。そこで今茲に法華經の成佛の特色たる即身成佛に就いて、管見を披瀝したいと思ふ。

即身成佛は、宗祖も千日尼御返事に

即身成佛とは一經第一の肝心也

と明された如く、法華經の眞髓である。即身成佛といふことは、輝師が

『即身トハ此身体ト云事ナリ。此身体ノマ、佛ニナルト云事ヲ、即身成佛ト申スナリ。

先ッ此人身凡夫ノ体ガ、ソノマ、佛ニナルト云、奇妙不思議ナ法門ハ、法華經第一ノ肝要ナリ』と述べられれに見ても分る通り、父母所生の肉身その儘、成佛することである。換言すれば、即身成佛とは身と佛の二つであるが、その身が如何に即し、その佛が如何に成すかといふので、こゝに權實本迹の相違が生れてくるので、妙一女御返事には

法華經の即身成佛に二種あり。迹門は理具の即身成佛、本門は事の即身成佛なり。今本門の即身成佛は、當位即妙本有不改と談ずるなれば、肉身をそのまま、本有無作の三身如來と云へる是也

と示された所以である。ところで此の即身成佛なる語の出所は如何にと考證して見るに、

即身成佛の義は、勿論法華經にあるが、その四文字の成語は經中には見當らない。それでは誰が云ひ初めたかといふに、支那に於ける天台大師も、法雲、嘉祥にも、即身成佛といふ語は全く無く、唯妙樂大師の文句記に、提婆品の龍女成佛を釋する時、

「即身<sub>ニ</sub>成佛」

の語を用ひられたに始まる。此の大師の註釋は、直ちに法華經の成佛をば明されたものではないが、兔に角即身成佛の文字をば最初に用ひられたものである。法華經の成佛に關し、即身成佛の語を重要視されたのは傳教大師であつて、大師の法華秀句の中に、「即身成佛化導勝」といふのがあつて、法

華經の即身成佛を一要目とせられたもの、その中に有名な

能化所化俱無歷劫妙法經力即身成佛

とあるのである。此の傳教大師の即身成佛の義も、未だ迹面本裏の立場を出でずとして、宗祖は更らに本面迹裏の實義より開顯して、屢々お用ひ遊ばしたが、何れにしても傳教大師に至つて、即身成佛の文義は備つたといふ可きである。扱て前の妙一女書に依つても分る通り、同じ即身成佛に就いても、台當兩家に相違がある。即ち台家は理具の即身成佛であり、當家は事具の即身成佛である。此の兩者の内容に就いては、綱要導師が迹門理具の即身成佛を明して、

台家所立迹門理一念三千者、依三方便品十如實相之說・觀底下凡夫理性所具三千。是則衆生性德妙法、所謂素法身也。莊嚴之以戒空慧三學、研之以三諦三觀、信之企之以二十五方便。簡之以十境十乘、苦修練行經六即階位、近證初住分真、遠期妙覺極果。從因向果、始覺三身。是云迹門理具即身成佛。

と述べ、次に本門事の即身成佛を明しては、

本門事即身成佛者、依壽量品我實成佛文底、所建立一念三千、而大覺世尊久遠實成當初所證得一事相之妙法。故云事。金錘論曰衆生但理諸佛得事乃至釋尊因行果德二法妙法蓮華經五字具足

我等受持此五字、自然讓與彼因果功德、故無始三道即三德轉三觀三諦即一心顯其所住之地常寂光土其人肉身即無作三身本門壽量當體蓮華佛是云本門事即身成佛

とある、要するに台家は迹面本裏方便品の始覺門從因至果衆生中心の經驗的立場に於て理觀を立て、

三觀三諦十境十乘の法行に依て、方に初住に登るものであり、當家は本面迹裏壽量品の本覺門從果向因佛陀中心の先驗的立場に於て事觀を立てるが故に、唯受持信唱の當處、法行を用ひずして自から究意に至るので之を名字即の位より即身成佛するといふのである。此の當家の成佛は、若し行人に約せば即身成佛、修行に約せば受持成佛、行意に約せば信念成佛、行相に約せば唱題成佛、國土に約せば娑婆即寂光、觀心に約せば事一念三千成佛と呼んでも良いので、唯身土妙に約して、即身成佛娑婆即寂光の色心成佛を擧げるのである、だから成佛の處は受持信唱の當處即佛土であり、成佛の時は受持信唱の當時即現世であり、成佛の身は受持信唱の當身即父母所生の肉身そのまゝである。然るに茲で少し論及す可きことは、法華經及び祖書中に、此れに反する如き諸文がある、今本經の文を擧げると、

一、提婆品第十二、

聞妙法蓮華經提婆達多品淨心信敬不生疑惑者不墮地獄餓鬼畜生生十方佛前所生之處常聞此經若生人中受勝妙樂若在佛前蓮華化生

## 二、藥王品第廿三

後五百歲中若有女人聞是經典始說修行於此命終卽往安樂世界阿彌陀佛大菩薩衆圍繞住處生蓮華中寶坐之上

## 三、普賢菩薩勸發品第廿八

若有人受持讀誦解說其義趣是人命終爲千佛授手令不恐怖不墮惡趣卽往兜率天上彌勒菩薩所

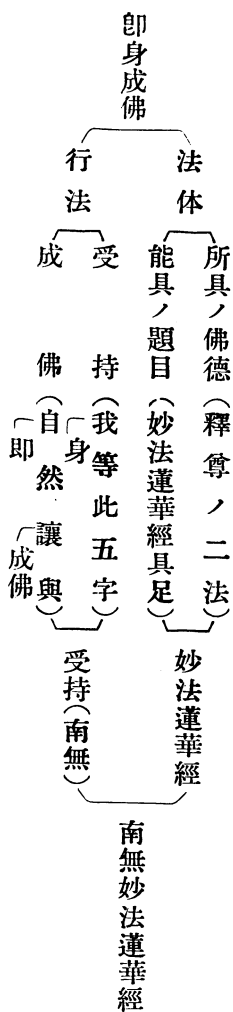
の諸文であり、祖書は持法華問答抄、初心成佛抄等であつて、此の二鈔は共に上根上機は卽身成佛が出来るも、下根下機の單信者は生十方佛前か、卽往安樂世界等、卽ち改轉成佛を許されるのみであるとする、それでは此等の卽成に異なる如き文に對する會通はどうかといふに、守護國家論に

信ニ法華涅槃ニ行者非レ可レ求ニ餘處ニ信ニ此經ニ人所住處卽淨土也。問云見ニ華嚴方等般若阿含觀經等諸經ニ勤ニ兜率西方十方淨土ニ其上見ニ法華經文ニ亦勤ニ兜率西方十方淨土ニ何違ニ此等文ニ但勤ニ此互礫荆之穢土乎。答曰爾前淨土久遠實成釋迦如來所觀淨土實皆穢土也。法華經亦方便壽量品ニ二品也。重壽量品定ニ實淨土ニ時此土卽定ニ淨土ニ了。但至ニ兜率安養十方難ニ者不レ改ニ爾前名目ニ於ニ此土ニ付ニ兜率安養等名ニ。例如下此經雖レ有ニ三乘名ニ不レ有ニ三乘ニ

と述べられてゐる。卽ち爾前の二乘は、法華經に至つて、皆一乘の人である如く、淨土等の名はあつ

ても、實際に存在するのは娑婆であると開顯せられた、殊に宗祖の教學上單信者の功用に就いて、佐前佐後の別があつて、佐前に於ては、「或惡趣可免出離是難」「或未來往生成佛可得即成是難」といふ台家附順で、受持即成は許されなかつたが、佐後に至つては積極的に本化別頭を發揮せられて、受持即成を高調せられたのである。

扱て夫れでは、即身成佛の法体及び行法は、何んであるかといふに、即成の法体は妙法蓮華經であり、即成の行法は受持である。その重なる典據は、觀心本尊鈔の受持讓與段であつて、その文は、釋尊因行果德二法妙法蓮華經五字具足。我等受持此五字自然讓與彼因果功德。であるが、今内容を簡明に圖示すれば、



となる、即ち即身成佛は受持信唱即南無にあるので、受持信唱は當家の事一念三千觀である、此の事

一念三千觀は南無妙法蓮華經である。

受持とは成佛であつて、成佛とは開覺の義なりと御義にもある如く、始覺即本覺と悟るのである。ところで即身成佛は一念三千を法門とするのである。事一念三千に外ならぬことは、開目抄に

法華已前の諸大乘經には女人成佛を許さず、諸大乘經には成佛往生をゆるすやうなれども或は改轉の成佛にして、一念三千の成佛にあらざれば有名無實の成佛往生也云云

とあるに依ても明かである。故に先に即身成佛に台當二家に於て、理事の別を生じたのは、その法門たる一念三千に理事即ち理觀と事觀の相異があつたからである。理事のあることは、綱要導師の前引の文に依ても示されてゐるが、治病鈔に

一念三千の觀法に二あり、一理二事なり、天台傳教等の御時には理也今は事也乃至彼は迹門の一念三千此は本門の一念三千也天地はるかに殊也云云

とある。此の理、事二觀を三大秘法抄に説かれて、理一念三千は、底下の凡夫理性所具の一念三千であつて、その證文は方便品の諸法實相所謂諸法如是相乃至欲令衆生開佛知見等云云と述べられ、事一念三千をば、大覺世尊久遠實成の當初證得の一念三千であつて、その證文は壽量品の然我實成佛已來無量無邊等云云と明されてゐる、當家の即身成佛の典據が然我實成佛なる壽量顯本の本門佛陀論にあるこ

とは明瞭である、では然我實成佛の義は如何と云ふに、御義口傳に

然りと雖も當品の意は我とは法界の衆生なり十界己々を指して我といふなり、實とは無作三身の佛なりと定めたり此を實といふなり 成とは能成所成なり 成とは開く義なり、法界無作の三身なりと開きたり佛とは之を覺知するを云ふ也云

とあつて、我とは、我即十界即法界即無作三身の佛であつて、釋尊の本覺開顯は、直ちに十界の本覺開顯となるのである。斯の如く壽量文底既に十界己々の當体を指して、釋尊の無作三身當体蓮華佛と顯すが故に、壽量品の正意は、我等衆生の行住坐臥の念念作業は、即是れ無作三身の所作であつて、妙法蓮華經の振舞と斷じてくるのである、故に輝師も

若曰「妙覺」曰「究竟」曰「成佛」者並約「無作本有自覺佛」者祖文悉然專談「本門成佛」故也所謂「事具即成者即是也耳矣非約修證」

と明し、更に三千論には

本門則約「事談」諸法常住「常住故名」實相「陰入界法隔礙當相皆本然相而無」非「眞實」苦惱逼迫皆常住事本佛無作法樂也無明塵勞昏暗當相皆本有不思議事相妙法之事相令然也招集緣起皆本佛無作神通變化也遍見邪見皆本佛無作自受用智而本有常住正見也



とある所以である、宗祖は當體義鈔に示して曰く、

正直捨<sup>三</sup>方便<sup>二</sup>但信<sup>ニ</sup>法華經<sup>一</sup>唱<sup>ニ</sup>南無妙法蓮華經<sup>一</sup>人煩惱業苦三道法身般若解脫三德轉三觀三諦即一心顯其人所住之處常寂光土也。能居所居身土色心俱体俱用無作三身本門壽量當體蓮華佛者日蓮弟子檀那等中事也。

右の文は、台家の理觀に簡んで、當家の單信唱題の絶對受持一行の一心に於て即身成佛娑婆即寂光の身土常住が現はれるが、それは無作三身の佛の俱体俱用とする。即ち法界依正全体無作本佛即南無妙法蓮華經なのである。即ち本門壽量文底の觀心を以てすれば、一切衆生森羅萬象は悉く、妙法蓮華經であり、本佛である、南無妙法蓮華經は此の本佛の俱体俱用である、この事は、御義口傳に

如來者釋尊、惣十方三世諸佛也。別本地無作三身也乃至無作三身實號南無妙法蓮華經云也乃至無作三身ノ所作何物ソト云時、南無妙法蓮華經也。

と示された、即ち普遍的價值者本佛が、自己限定をなして、十界の區別を生じたので、此の十界は勿論價值的段階である、体たる能作的普遍者本佛は、用たる所作的個別者十界と現象し、十界として活動するのである、十界は法界即三千の諸法のことである。三千は十界の價值的區別に、更に十如、三世間を相乘して、詳細に價值的存在界を示したものに過ぎない、故に輝師も云はるゝ如く、當家は三

千よりは、むしろ十界の方を重んずる譯である。ところで此の普遍者本佛の明證性と十全性との完全なる一致が具体的体験即受持であつて、能作的普遍者本佛は、所作的個別者十界の中に在つて、無限發展の真相を自知自證するのである、そこに價值的差異を生ずるので、山川先生の所謂

一分の冥契（入曼荼羅）等は一分の成佛、三分の冥契は三分の成佛、十分の冥契は十分の成佛である、乃至分々の成佛を言ふを許すは、本門圓教の圓教たるところで、本有本來の佛身を、現實の即身において分々に成就するが故に、即身成佛といふのである。

とは、かゝる意味であると思ふ。要するに本佛の体用本迹を以て、即身成佛を論するのが、目的論的價値觀たる本門佛陀論に立脚する事の即身成佛と思ふのである。是を壽量品には、如來密神通之力、或は亦一心欲見佛不自惜身命時我及衆僧俱出靈鷲山と説き、祖書には俱体俱用無作三身當体蓮華佛云云と明す、佛界緣起と云ひ、十界事常住と呼ばれるものは此の謂である。そこで受持だが、田中先生が四句分別をせられた觀而非想、想而非觀、觀而非信、信而不觀の第四句は本覺門の具体的信即受持である。即ち思惟の抽象による概念的區別をせられない具体的宗教意識に於ける絶對唯一の直觀的事實を示すもの、南無妙法蓮華經即ち無作三身の本佛の具体的体験そのものであつて、之が成佛である。而して本佛なる實在佛即佛と題目なる價値即法とは、具体的直觀に於ては區別されない、是れが壽

量文底の秘義であり、然我實成佛の實義に外ならない。そこで、これを宗學上より明確にする爲め略述すると、先づ本尊鈔の四十五字の法體である、其の文は

今本時娑婆世界離<sup>三</sup>災<sup>二</sup>出<sup>四</sup>劫<sup>一</sup>常住淨土佛既過去不滅未來不生所化以同體此卽己心三千具足三種世間也、

である。此の文を輝師は略要に明して、

此卽己心三千具足、啓蒙、事常住ノ依正ヲ取テ、己心ノ全体トス、又本時ノ生佛ヲ全シテ、常住ノ心法トス、一體ノ三法無二無別ナリ。是正シク事一念三千ヲ結成シ、能觀ノ事行ヲ成就セシム乃至此妙境ヲ顯ハス事、次下所顯ノ本尊ニヨル、而モ能觀ノ行法ハ、次ニ明セル付囑ノ五字是ナリ、觀心ノ正體ハ正シク今文也、己心ヲ觀シテ本時常住ノ十法界ヲ見ル是也、乃至故知ス、境ニ卽シテ觀、能觀ノ唱題ト所觀ノ本尊ト俱ニ今文ヲ以テ正體ト定ムヘシ 今文ハ壽量ノ微旨、所囑ノ法體ヲ明ス也、三種世間也トハ、本時ノ娑婆ハ國土世間ナリ。本時ノ生佛ハ衆生世間及ビ五陰世間ナリ、別スレハ則三千具足、總スレハ則三種世間、一体無餘ノ義ヲ顯スカ故 重ネテ三種ノ世間ト云、唯心無別ヲ示也、所依ノ經文者、壽量ノ如實知見三界之相等ノ文ト、我此土安穩等ノ文トハ、正シク今文所談ノ依文ナリ、經ノ二文及ビ今文皆依報ノ國土ヲ舉テ本トスル事ハ、果報ノ十界、事具ノ體相ヲ

顯ハス也乃至身土ニ對シテ本有ノ覺體ヲ顯ハス。

是正シク本門觀心ノ妙境ナリ、故ニ結シテ遍於法界ト云、三種世間ト直此道場ト云、速成就佛身ト云、當ニ知ルヘシ身土是正體也云云

とある。此の釋に依ても分る如く、四十五字の法體は果報の十界、事具の覺體を顯してゐるので、宗教的體驗即受持の反省たる本佛果上妙事の心界に映發した無始本有の三千を顯はしてゐるので、是を事の一念三千といふのである、事の一念とは、本佛果上の一念、佛の一念といふこと、智應先生の語をかりれば、所謂本佛果上の一念、本法受持の一念、要法受持の一念である。即ち無作三身の佛自體の一念、九識清淨心たる宗教意識の一念である。是れは先驗的本覺的に理想我爲本（佛陀中心）に論ずるから、普遍的理想者本佛の意識となるのであるが、若し經驗的始覺的に現實我爲本（衆生中心）に論ずれば、個別的現實者衆生の意即六識陰妄心となるのである。此の一念を己心、受持、信、觀、唱と爲すのであるが、此等は凡て超越的なる能作的普遍者本佛が所作的個別者十界に内在して、自己反省即自知自證することで唯佛與佛の境、是を壽量品には如來如實知見とも、如來明見とも云はれてゐる。其の本佛の體用たる具體的信の反省され抽象された法界依正即妙法蓮華經を本尊鈔には四十五字の法體を以てし、壽量品には我此土安穩等の文を以て顯はしたに過ぎぬ。要するに無作三身の本佛

の体用本迹即南無妙法蓮華經即受持を以て證果を立つるのが事の即身成佛である。此の受持即事の即身成佛に至る方法として、宗祖は三大祕法なる三箇の大祕法を建立せられ此の境地に達し、遂には究竟即に登らしめんとせられたもので、茲に従果向因本覺門に立つた從因至果始覺門の修行即ち本果妙に於ける本因妙の無作之作本有の妙行が生れるのであると思ふ。

以上蕪雜なる一管見を忽々の間に草したが、窮子唯々聖意を穢すことなきを懼るのみ、最後に神力品の偈を掲げ、以て此の拙稿を擱く次第である。

於我滅度後 應受持此經 是人於佛道 決定無有疑

南無妙法蓮華經